

古事類苑

飲食部四

料理下

揚物
精進揚

〔大草家料理書〕淨請物之覺

一ふや、ごんにやく、とうふ何も萬の精進物、油にてあげても吉也、但淨請物は口によりてする也、

〔料理物語 磯草〕昆布 汁 に物 にあへ くはし むし漬 たし 油あげ 其外いろく

略

〔塵塚談^上〕あぶら揚賣童の事、我等顯道小川二十歳頃迄は貧民の子ども十歳十二三歳なるが、提籠へ油揚のみを入賣歩行しが、近年絶てなし、其頃見苦しき童を見ては、皆人あぶらげ賣のやうだといひけり、

〔守貞漫稿^{生六}〕塵塚談ニ云、油揚ケ賣○中廿歳比バ寶曆中ヲ云、○中油揚トノミ云ハ、今人ハ三都

トモニ豆腐油アゲノゴトトズル也、恐ラクハ昆布ノ油揚ナル歟、昆布ナデバ京坂ニハ今モ有之、

左ニ出ゼリ、○中

揚昆布賣 春ノ花觀等ノ群集ノ所ニ賣ル、昆布ノ油揚也、一ケ價一文、專ラ十餘歳ノ童子賣之、詞

ニコブヤアゲゴブ、○中

揚再出昆布賣リ 春二三月ノ比、花見遊參人ノ群集ノ所へ賣リ巡ル、高二尺許、亘一尺餘ノ目籠ニ、

掛子アリテ、裏ヨリ紺紙ヲハリ、此籠ニ昆布ノ油揚ゲ入レ賣ル也、貧家男子ノ十二三歳ナル者也、